

アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成 22 年度 実施計画書

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	名古屋大学大学院文学研究科
(カメルーン) 拠点機関：	ヤウンデ大学 I
(マリ) 拠点機関：	バマコ大学
(セネガル) 拠点機関：	シェイク・アンタ・ディオップ大学
(タンザニア) 拠点機関：	ダルエスサラーム大学

2. 研究交流課題名

(和文)：伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態

(交流分野：文化人類学)

(英文)：Religious Dynamics of Contemporary Africa concerning the destruction of Traditional Life Mode and New Religious Movement

(交流分野：Cultural Anthropology)

研究交流課題に係るホームページ：

<http://afroasia.lit.nagoya-u.ac.jp/~hikaku/dryland/dynamicsreligion/home.html>

3. 採用年度

平成 21 年度 (2 年度目)

<http://afroasia.lit.nagoya-u.ac.jp/~hikaku/dryland/dynamicsreligion/home.html>

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：名古屋大学大学院文学研究科

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：

名古屋大学大学院文学研究科・研究科長・羽賀祥二

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：

名古屋大学大学院文学研究科・教授・嶋田義仁

協力機関：

事務組織：研究協力部研究支援課、文系事務部経理課

相手国(地域)側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国(地域)名：カメルーン

拠点機関：(英文) University of Yaoundé I

(和文) ヤウンデ大学 I

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of Arts, Letters and Human Sciences ・ Associate professor ・ Saibou Nassourou

協力機関：(英文) University of Ngaoundéré
(和文) ガウンデレ大学

(英文) University of Maroua
(和文) マルア大学

(2) 国(地域)名： マリ

拠点機関：(英文) University of Bamako
(和文) バマコ大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of Languages, Arts and Human Sciences (FLASH)・Professor・Samba Djiallo

協力機関：(英文)
(和文)

(3) 国(地域)名： タンザニア

拠点機関：(英文) University of Dar es Salaam
(和文) ダルエスサラーム大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Institute of Swahili・Professor・John G.Kiango

協力機関：(英文)
(和文)

(4) 国(地域)名： セネガル

拠点機関：(英文) Cheikh Anta Diop University
(和文) シェイク・アンタ・ディオップ大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Fundamental Institute of Black Africa (IFAN)・Professor・Abdou Salam Fall

協力機関：(英文)
(和文)

5. 全期間を通じた研究交流目標

「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態」をテーマに、日本側拠点機関に属する研究者とアフリカ拠点機関に属する研究者とのあいだで、共同研究・研究者交流、セミナー等の学術交流をおこない、共同研究を推進する。そのために、おもに以下のことをおこなう。

1. 日本側拠点機関に属する研究者とアフリカ拠点機関との間で、研究情報を共有するサイバー・ネットワークを構築する。

2. アフリカ拠点機関に眠っている修士論文、博士論文、未刊論文などを共通して利用できるデータ・ベースを構築する
3. 研究成果は電子ジャーナル *Religious Dynamics in Africa* と簡易印刷でも公刊する。
4. 日本人若手研究者のみならずアフリカ人若手研究者の育成を、アフリカと日本の共同指導によっておこなう。そのために、民間財団資金や国費留学生制度を利用して、日本人大学院生のアフリカの大学への留学、アフリカ人大学院生の名古屋大学への留学を推進する。
5. 研究は、3 テーマ「アフリカ・イスラームの動態」「アフリカの都市化とグローバル化の中での宗教動態」「伝統価値の崩壊と青少年・教育問題と宗教」を柱にしてすすめる。

6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

6.1 国際セミナーを名古屋大学で開催した。

「伝統様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカの宗教動態」についてのセミナーを名古屋大学で開催した。

国内外から全体（科研費Sによる参加者等含む）で6カ国から25名の研究者が参加し、21もの研究発表がおこなわれた。研究発表者の内訳は、カメルーン2大学（マルア大学とヤウンデ大学I）から2名、マリのバマコ大学から1名、アルジェリアの高等師範学校から1名、中国中央民族大学から1名、そのほか、名古屋大学研究生のアフリカ人研究者1名、名古屋大学博士課程の中国内モンゴル人大学院生2名、千葉大学博士課程大学院生3名。日本側は、千葉大学文学部准教授1名、酪農学園大学教授1名、名古屋大学文学研究科教授1名、同博士課程大学院生3名、同修了者1名、中部大学中部高等学術研究所研究員1名、総合地球環境学研究所研究員2名であった。

セミナー参加者が、事業の問題意識と意義・目的を確認したうえで、アフリカとアジアの事例研究について社会科学、自然科学の視点より議論した。また、今後の事業計画についても協議した。

【成果】

本セミナーによる主成果は以下の4点である。

1. 各国拠点機関の参加研究者を招聘することで、研究者交流とともに、今後の事業計画について具体的に協議することができた。
2. コーディネーター嶋田義仁による基調講演により、参加研究者が、現代アフリカの宗教動態についての問題意識と事業の意義を確認・共有することができた。
3. スワヒリ、ガーナ、カメルーン、スーダン、サハラ・サーヘルというアフリカの多様な地域の事例研究を討議することで、アフリカの伝統様式の崩壊と再宗教化について、多角的理解が可能となった。
4. 科学研究基盤S「牧畜文化の解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究（研究代表：嶋田義仁）」の共催で、中国人研究者、アルジェリア人研究者の参加を得ることによって、伝統様式の崩壊と再宗教化の問題が、アフリカにとどまるだけでなく、アジアにおいても重要な問題であることが確認できた。現代アフリカの宗教動態を、日本や中国の事例とともに検討することで、よりグローバルな観点から捉えなおす必要がある。

*なお、セミナー成果は本事業のホームページをつうじて公開される。

6.2 アフリカ人研究者 3 名 (Saibou Nassourou : カメルーン女性問題省次官 : ヤウンデ大学 I 講師、Mahmoudou Djingui : マルア大学准教授、Naffet Keita : バマコ大学准教授) を名古屋大学に招いて共同研究をおこなった。

6.3 コーディネーターの嶋田義仁名古屋大学文学研究科教授が、以下の 4 大学を訪れ、共同研究をおこなった。

- ・バマコ大学 : Naffet Keita 准教授、Samba Djallo 教授・副学長
- ・ヤウンデ大学 I : Saibou Nassourou 講師・カメルーン女性問題省次官
- ・マルア大学 : Mahmoudou Djingui 准教授、Saibou Issa 教授・高等師範学長・シェイク・アンタ・ディヨップ大学 IFAN : Abdou Salam Fall 教授

6.4 コーディネーターの嶋田義仁は、マルア大学の国際学術委員に就任、同大学学術誌の編集委員となった。

6.5 とくに課題とした問題

1. 日本側拠点機関とアフリカ拠点機関との間のインターネット・ネットワーク構築、については基本的な準備はととのった。

2. アフリカ拠点機関に眠っている修士論文、博士論文、未刊論文などを共通して利用できるデータ・ベースの構築は、リスト作りを開始した。

3. 研究成果は電子ジャーナル **Religious Dynamics in Africa** と簡易印刷でも公刊する。欧文原稿の査読に時間を要し、公開は来年度。これには若手研究者の研究を積極的に登用する。

4. 日本人若手研究者とアフリカ人若手研究者の育成は、日本とアフリカでおこなった共同研究とセミナーに、若手研究者を参加させることによって、軌道にのりだしている。とくに、若手研究者がすすめるべき研究のテーマが明確になった。日本人大学院生のアフリカの大学への留学、アフリカ人大学院生の名古屋大学への留学推進は、このような若手育成の中でおこなうが、本年よりガウンデレ大学の大学院生が名古屋大学文学研究科博士課程に留学している。

5. 研究は、3 テーマ「アフリカ・イスラームの動態」「アフリカの都市化とグローバル化の中の宗教動態」「伝統価値の崩壊と青少年・教育問題と宗教」を柱にして進められた。とくに、アフリカにおける女性問題をめぐっては、Saibou Nassourou ヤウンデ大学 I の講師は、カメルーン女性問題省次官であることや、名古屋大学・大学院生の小林未央子がカメルーンのガウンデレ大学に留学し、日本大使館の専門調査員もつとめた経歴を生かしてアフリカ・ムスリム社会の女性研究を深くすすめたこともあって、かなりすすんだ議論がおこなわれた。Saibou Nassourou カメルーン女性問題省次官を中心に、アフリカの女性問題をテーマにした国際会議を組織する可能性がみえてきた。

7. 平成22年度研究交流目標

1.前年度と同様に「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態」という共同研究を、次の3点において、すすめる。

- ① この数十年のアフリカの著しい変貌による伝統的生活様式・伝統的価値の崩壊にともなう精神的危機の存在。
- ② それにともなう「再宗教化」。
- ③ 経済開発一辺倒でアフリカ問題を解決することの限界。

2. また、この研究を、3 テーマ「アフリカ・イスラームの動態」「アフリカの都市化とグローバル化の中での宗教動態」「伝統価値の崩壊と青少年・教育問題と宗教」を柱にしてすすめる。

3. そのうえで、「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態」をめぐる国際共同研究推進を、本年は、アフリカの大学中心にすすめることに重点をおく。また本年度の国際共同研究には、日本アフリカとも若手大学院生の交流を含める。

4. 本年は昨年の研究交流の成果、および、本年の新たな成果を、研究報告 **Religious Dynamics in Africa** として公刊する。その際、以下のメンバーを編集員として、国際的な編集・査読体制による研究成果の公表をめざす。そのなかで、日本とアフリカの若手研究者の育成をはかる。

- ・バマコ大学 Naffet Keita 准教授、Samba Djallo 教授・副学長
- ・ヤウンデ大学 I Saibou Nassourou 講師・カメルーン女性問題省次官
- ・マルア大学 Mahmoudou Djingui 准教授
- ・シェイク・アンタ・ディヨップ大学 IFAN の Abdou Salam Fall 教授
- ・ダルエスサラーム大学 John G.Kiango

8. 平成22年度研究交流計画概要

8-1 共同研究

「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態」を共同研究全体のテーマとするが、昨年構成した次の3研究テーマについて研究班での共同研究をさらに発展させる。ただし、本年の国際共同研究は共同でおこなう。

- ① 「アフリカ・イスラームの動態」班 責任者 嶋田義仁・文学研究科教授。アフリカ・イスラームの動態を、特に、タンザニアやセネガルなど、ヨーロッパ植民地主義の影響の大きかった地域で明らかにする。
- ② 「アフリカの都市化とグローバル化の中での宗教動態」班 責任者 和崎春日・中部大学・国際関係学部・教授。グローバル化の中で日本をはじめアフリカ人の海外進出が激化しているが、近年は、未熟練労働者としてではなく、ビジネスマンとしての海外進出が多

くなっている。その中でどのような宗教動態が見られるかを明らかにする。

③「伝統価値の崩壊と青少年・教育問題と宗教」班 責任者 佐々木重洋・文学研究科准教授。伝統価値の崩壊のなかでアフリカにいかなる青少年問題と教育問題が生じ、それに宗教がどのように関与しているかを、特に学生数増加が著しい大学教育に焦点をあてる。

また、本年はアフリカ独立 50 年にあたり、アフリカ各国で、独立後 50 年の歩みを振り返る催しが計画されている。セネガルでは、本年を「アフリカ再生」の年として位置づけ、首都ダカールの高台には、肩を組み合せて空を指差す男女の巨大ブロンズ像が建設された。「アフリカ再生」のスローガンとともに、さまざまな社会・経済・文化的改革も試みられている。こうしたアフリカ近代史の転換に注目しながら、本研究課題に取り組む。

本年は、アフリカ海岸部に位置するアフリカ大学（ダルエスサラーム大学と、シェイク・アンタ・ディオップ大学を予定）の研究者 2 名を延べ合計 30 日間名古屋に招き、共同研究をおこなうとともにセミナーもおこなう。また、日本側研究者をアフリカ大学に派遣して共同研究をおこなう。そのうち 1 名は若手大学院クラスの研究者とする。

こうした共同研究を通じて次のような研究インフラの形成をはかる

- ①ホームページによる共同研究成果（Religious Dynamics in Africa）とデータ・ベースの公表。
- ②拠点間のネットワークの強化：拠点間ネットワークはインターネットにより結ばれる。各国拠点研究者がホームページ上で議論・意見交換ができるシステムを推進する。
- ③若手研究者の人材育成：日本及びアフリカの若手研究者を共同研究に積極的に参加させる。その実施のための実務にも若手研究者を登用し、研究マネジメントの取得もはかる。若手研究者の研究成果公表の場を Religious Dynamics in Africa に設ける。以上により調査研究、成果発表、研究マネジメントの能力にたけた若手研究者の人材育成をはかる。

8-2 セミナー

「伝統様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカの宗教動態」をテーマに拠点機関研究者との合同共同セミナーを一回開催する。

このセミナーにはアフリカの大学（ダルエスサラーム大学と、シェイク・アンタ・ディオップ大学を予定）の研究者 2 名を名古屋に招く。前年はアフリカの内陸国（マリとカメルーン北部）の研究者を中心にセミナーを開催したが、本年はインド洋に面したタンザニア、大西洋に面したセネガルというヨーロッパ植民地主義の影響を強く受け、それゆえ、キリスト教文化や近代化の進展が著しい国の研究者を中心にセミナーを開催する。折しも、本年はアフリカ独立 50 年にあたり、アフリカ各国で、独立後 50 年の歩みを振り返る催しが計画されている。独立 50 年を機にアフリカがどこに向かおうとしているかという問題も

含めて、セミナーを開催したい。

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

なし

9. 平成22年度研究交流計画総人数・人日数

9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人/人日〉	カメルーン 〈人/人日〉	マリ 〈人/人日〉	セネガル 〈人/人日〉	タンザニア 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		1/20	1/15	0/0	1/15	3/50
カメルーン 〈人/人日〉	0/0					0/0
マリ 〈人/人日〉	0/0					0/0
セネガル 〈人/人日〉	1/15					1/15
タンザニア 〈人/人日〉	1/15					1/15
合計 〈人/人日〉	2/30	1/20	1/15	0/0	1/15	5/80

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。（なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。）

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。（合計欄は（ ）をのぞいた人・日数としてください。）

9-2 国内での交流計画

20/35 〈人/人日〉

10. 平成22年度研究交流計画状況

10-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	平成 21 年度	研究終了年度	平成 23 年度		
研究課題名	(和文) 伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態 (英文) Religious Dynamics of Contemporary Africa concerning the destruction of Traditional Life Mode and New Religious Movement						
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 名古屋大学大学院文学研究科・教授・嶋田義仁 (英文) Graduate School of letters Nagoya University. Professor. Dr. Shimada Yoshihito						
相手国側代表者 氏名・所属・職	Mali : Dr. Samba Djallo, University of Bamako, Flashe ; Professor Cameroun: Dr. Saibou Nassourou, University of Yaoundé I, Associate professor Tanzania : Dr. John G.Kiango, University of Dar es Salaam, Insitute of Swahili, Senegal : Dr. Abdou Salam Fall, University of Cheikh Anta Diop, Fundamental Institute of Black Africa (IFAN)・Professor・						
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流						
	派遣先	日本	カメルーン	マリ	セネガル	タンザニア	計
	派遣元	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>		<人/人日>	<人/人日>
	日本 <人/人日>		1/20	1/15	0/0	1/15	3/50
	カメルーン <人/人日>	0/0					0/0
	マリ <人/人日>	0/0					0/0
	セネガル <人/人日>	1/15					1/15
	タンザニア <人/人日>	1/15					1/15
	合計 <人/人日>	2/30	1/20	1/15	0/0	1/15	5/80
	② 国内での交流		20人/35人日				

22年度の研 究交流活動計 画	<p>研究交流活動は、3テーマ「アフリカ・イスラームの動態」「アフリカの都市化とグローバル化の中での宗教動態」「伝統価値の崩壊と青少年・教育問題と宗教」を柱にして、今年度は、昨年日本に招かなかったタンザニア、セネガルからの研究者を日本に招くことを中心にして、アフリカのなかでも「近代化」のすすんだアフリカ大陸東西の海岸部に位置するタンザニア、セネガル中心の交流によって、共通研究課題の研究をすすめる。昨年日本に研究者を招いたカメルーンとマリ、それに本年の研究交流の中心になるタンザニアには日本側研究者を派遣して現地での共同研究をおこなう。ただし、国内共同研究については、3研究班での研究も、共同研究会を開催し研究論文を作成することによってすすめる。そのうえで、研究ネットワーク構築をすすめる。Religious Dynamics in Africaを2巻刊行する。</p>
期待される研 究活動成果	<ul style="list-style-type: none"> ・アフリカの現代的動態をふまえたアフリカ宗教研究をめぐる21年度研究交流活動と22年度研究交流活動を Religious Dynamics in Africa 2巻として発表する。 ・内容としては、独立50年に至ったアフリカの新状況下におけるアフリカ女性問題、アフリカ教育問題、アフリカ・イスラームをめぐるアフリカ宗教の新たな動向の整理分析が中心となる。
日本側参加者数	
23名	(13-1 日本側参加者リストを参照)
(カメルーン)国(地域)側参加者数	
3名	(13-2 (カメルーン)国側参加者リストを参照)
(マリ)国(地域)側参加者数	
2名	(13-3 (マリ)国側参加者リストを参照)
(タンザニア)国(地域)側参加者数	
1名	(13-4 (タンザニア)国側参加者リストを参照)
(セネガル)国(地域)側参加者数	
1名	(13-5 (セネガル)国側参加者リストを参照)

10-2 セミナー

—実施するセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業 伝統様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカの宗教動態 (英文) JSPS AA Science Platform Program Religious Dynamics of Contemporary Africa concerning the destruction of Traditional Life Mode and New Religious Movement
開催時期	平成 22 年 9 月 14 日～平成 22 年 9 月 16 日 (3 日間)
開催地 (国 (地域) 名、都市名、会場名)	(和文) 日本、名古屋、名古屋大学大学院文学研究科 (英文) Japan, Nagoya, Graduate School of letters Nagoya University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 名古屋大学大学院文学研究科・教授・嶋田義仁 (英文) Graduate School of letters Nagoya University. Professor. Dr. Shimada Yoshihito
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国(日本)	
日本 〈人／人日〉	A.	
	B.	4/12
	C.	19/57
カメルーン 〈人／人日〉	A.	
	B.	
	C.	
マリ 〈人／人日〉	A.	
	B.	
	C.	
セネガル 〈人／人日〉	A.	
	B.	1/15
	C.	
タンザニア 〈人／人日〉	A.	
	B.	1/15
	C.	

合計 〈人／人日〉	A.	
	B	6/42
	C	19/57

A.セミナー経費から負担

B.共同研究・研究者交流から負担

C.本事業経費から負担しない（参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。）

セミナー開催の目的	「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカにおける宗教動態」をめぐる国際共同研究をすすめ、名古屋大学大学院文学研究科におけるアジア・アフリカ学術基盤形成をおこなう。これにより、日本とアフリカ間、アフリカ間の研究者の交流対話の場を提供することによって、新たな研究交流の潮流をつくる。さらに、若手研究者を、最先端のアフリカ研究の流れのなかに巻き込む。
期待される成果	本年はアフリカ植民地化の拠点となり、キリスト教文化と近代化の進展が著しい海岸国（タンザニア、セネガル）研究者中心のセミナーを開催する。アフリカ政治経済の発展要害の一つは、内陸イスラーム圏と海岸部キリスト教圏との対立であったが、アフリカ独立 50 年をむかえ、後者においても、植民地主義主導の近代化路線の再検討が進んでいる。AU 成立に伴い、近隣諸国交流を促進する地域共同体形成も進んでいる（共通旅券化、自由貿易推進、高等教育の共同化など）。こうした現代アフリカの体制の大変動とこれにともなう新たな宗教動態が明らかにされる。若手研究者には、こうした最先端のアフリカ動態とその理解方法の諸例を示すことによって、最先端のアフリカ研究の流れに導き、アフリカの大学と名古屋大学と共同でその育成がはかられる。

セミナーの運営組織		コーディネーター： 嶋田義仁 名古屋大学大学院文学研究科・教授 運営委員： 和崎春日 中部大学・国際関係学部・教授 佐々木重洋 名古屋大学大学院文学研究科・准教授 山田肖子 名古屋大学大学院文学研究科・准教授 事務局 松平勇二 日本学術振興会特別研究員 ウスマース・アダマ名古屋大学大学院文学研究科博士課程			
開催経費分担内容と概算額	日本側	内容	国内旅費	金額	20,000 円
			謝金		200,000 円
			備品・消耗品		30,000 円
			その他経費		50,000 円
			合計		300,000 円
	() 国 (地域) 側	内容		金額	
	() 国 (地域) 側	内容		金額	

10-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

① 相手国との交流

派遣先 派遣元	日本 〈人／人日〉	カメルーン 〈人／人日〉	マリ 〈人／人日〉	タンザニア 〈人／人日〉	計 〈人／人日〉
日本 〈人／人日〉					
カメルーン 〈人／人日〉					
マリ 〈人／人日〉					
タンザニア 〈人／人日〉					
合計 〈人／人日〉					
② 国内での交流 人／人日					

1 1. 平成 2 2 年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	400,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	3,300,000	
	謝金	600,000	
	備品・消耗品購入費	210,000	
	その他経費	320,000	
	外国旅費・謝金に係る消費税	170,000	
	計	5,000,000	研究交流経費配分額以内であること
委託手数料		500,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。 また、消費税額は内額とする。
合 計		5,500,000	

1 2. 四半期毎の経費使用見込み額及び交流計画

	経費使用見込み額 (円)	交流計画人数<人/人日>
第 1 四半期	100,000	5/5
第 2 四半期	2,840,000	10/60
第 3 四半期	1,660,000	6/40
第 4 四半期	400,000	4/10
合計	5,000,000	25/115